

多様化する在日ネパール人とネパール人学校 —インタビュー調査からみるコロナ禍の影響を含めたその実態—

斎 藤 敬 太 ・ 村 本 茜

1. はじめに
2. 在日ネパール人の概要
3. エベレスト・インターナショナル・スクール・ジャパンの概要
4. 調査時期・方法
5. 2019年9月のインタビュー（コロナ禍前）
6. 2021年9月のインタビュー（コロナ禍）
7. おわりに

1. はじめに

近年増加している在日外国人の国籍の一つとして、ネパールが挙げられる。在日ネパール人は、かつてはインド料理店のコックとしての来日が多かったが、その後留学生としての来日が急増した。またネパールからの家族の呼び寄せや、日本での出産など、その背景は多様化・複雑化している。ネパールにルーツを持つ子どもたちの増加に伴い、2013年には東京都杉並区に世界で唯一のネパール人学校も創立された。本稿では、在日ネパール人について概説した後、ネパール人学校「エベレスト・インターナショナル・スクール・ジャパン」の創立者のブパール・マン・シュレスタ氏に2019年9月と2021年9月に実施したインタビューについて記す。2021年9月の2度目のインタビュー調査により、新型コロナウイルス感染拡大以降の影響についても明らかにしたうえで、今後の展望についても言及する。

2. 在日ネパール人の概要

グローバル化に伴い、在日外国人は増えつつあ

るが、その中でもネパール人の増加が著しい。特に2012年頃から、大勢のネパールの若者たちが留学生として入国し始めたが、現在は留学に限らず、家族滞在や特定技能など、様々な身分の者が暮らしている。昨今の社会が多文化化する背景として、外国人生活者の国籍や民族だけでなく、身分や地位に基づく在留資格の多様性もあると考えられる。

法務省出入国在留管理庁（2021a）によると、2020年末の在留外国人数は288万7,116人であった。新型コロナウイルス感染拡大前の2019年末に過去最多となった293万3,137人と比較すると、わずかに減少しているが、それでも過去2番目の多さである。その国籍は様々であるが、在日ネパール人の人口推移のみに絞って示すと、図1のようになる。2019年末の時点で在日ネパール人は9万6,842人で過去最多、2020年末は過去2番目の9万5,982人であるが、約10年前から見ても年々急増していることが線グラフからも読み取れる。

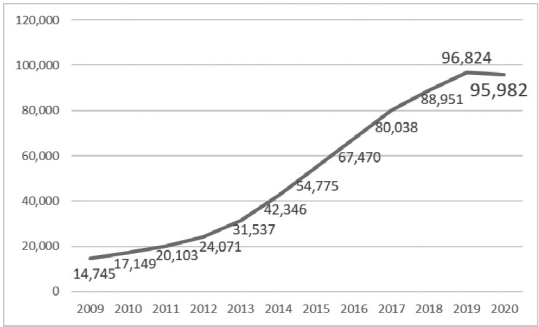


図 1. 在日ネパール人の人口推移

法務省出入国在留管理庁（2021b、表 1）によると、ネパール人の在留資格別の人口では、活動資格として最も多く占めるのは「留学」であり、次いで通訳・翻訳やホテルスタッフ、海外取引業務等の「技術・人文知識・国際業務」、そして「技能」である。技能ビザ取得には 10 年以上の実務経験が条件とされており、日本各地に点在するインド・ネパールレストランに勤めるコックは、これにあたる。また、2019 年より新設された「特定技能」は、人手不足が深刻な 14 の産業分野において、一定の産業性・技能を有し、即戦力となるものを受け入れる制度であり、現在はコロナウイルスの影響による入国制限や企業の採用抑制等で、資格保有者数は少数ではあるものの、今後は増える見通しである。

ネパール人就労者は、日本での生活に基盤ができた後に母国の家族を呼び寄せる傾向がある。筆者（村本）が知るかつて留学生だった者たちの中にも、専門学校や大学在籍中、もしくは卒業後に、子どもや配偶者を呼び寄せて、現在一緒に暮らしている例がある。また、日本国内で新たにネパール人パートナーとの出会いがあり、結婚や出産にまで至るというケースも見られ、家族滞在者は増加している。現在東京の新大久保には「リトル・カトマンズ」や「リトル・ネパール」と呼ばれるネパール人集住地域が存在し、通りにはネパール人向けの飲食店やスパイス店等が立ち並ぶ。

表 1. ネパール人の在留資格とその人数

活動資格	留学	23,116
	技術・人文知識・国際業務	15,581
	技能	12,524
	特定活動	2,932
	経営・管理	1,708
	技能実習	449
	特定技能	135

	介護	124
	企業内転勤	68
	高度専門職	49
	教授	37
	教育	16
	芸術	8
	研究	6
	研修	-
	文化活動	4
	宗教	2
	報道	1
	医療	1
	法律・会計業務	-
	興行	-
	計	56,761
身分資格	家族滞在	31,334
	永住者	5,179
	日本人の配偶者等	1,059
	定住者	884
	永住者の配偶者等	762
	特別永住者	3
	計	39,221
	総数	95,982

3. エベレスト・インターナショナル・スクール・ジャパンの概要

前述のとおり、在日ネパール人がネパールから家族を呼び寄せる者が多かったことなどから、ネパール人の子どもたちが増加していった。そのような背景から、2013 年に特定非営利活動法人ネパール教育支援センターが、東京都杉並区阿佐ヶ谷にネパール人学校「エベレスト・インターナショナル・スクール・ジャパン（Everest International School, Japan）」（以下「EISJ」）を創立した。シュレスタ氏によると、当時は 13 人の在籍生でスタートしたとのことである。2015 年には、ネパール政府から「世界で唯一のネパール人学校」として認定され（エベレスト・インターナショナル・スクール・ジャパンホームページ）、2018 年には、規模拡大のため同区荻窪に移転し、2021 年現在では幼稚園から高校まで約 280 人の学生が在籍している。なお、日本でいう高校までをネパールの教育制度では、初等教育 5 年、前期中等教育 3 年、中期中等教育 2 年、後期中等教育 2 年と区分している（文部科学省 2021）。特に中期中等教育までの 10 年で卒業する場合と後期中等教育までの 12 年で卒業する場合があり、後期中等教育

を「10+2 (テン・プラス・ツー)」と呼ぶ。現在、EISJにはこの「10+2」までがそろっている。

本来はネパール人児童・生徒のために創立された教育機関であるが、在籍する児童・生徒の国籍はネパール以外にも、アメリカ、ニュージーランド、フィリピン、日本、パキスタン、イタリア、バングラデシュ人など多様である。ネパールのカリキュラムに沿った教育を提供しているが、日本で生活しているという環境に合わせて、日本語クラスも週3回ある。また、日本の文化について学ぶ機会も設けられている。

4. 調査時期・方法

そのような日本で、そして世界で唯一のネパール人学校であるが、その実態はどのようなものなのかを知るために、創立者であるブパール・マン・シュレスタ氏にインタビュー調査を実施した。筆者（斎藤・村本）が2019年9月にEISJを訪問した際に対面で行ったものと、筆者（村本）が2021年9月にオンラインで行ったもの、計2度にわたってEISJの現状を調査した。特に2度目のインタビューにおける主なテーマは、コロナ禍によってどのような影響を受けたのかということである。

5. 2019年9月のインタビュー（コロナ禍前）

2019年のインタビューは、EISJへ訪問して実施した（図2）。



図2. EISJの校舎

インタビュー前にはシュレスタ氏から校内を案内され、子どもたちの学習環境を垣間見ることが

できた。

校内見学後、インタビュー調査を開始した（図3）。調査では、第3節で述べたようなEISJの概要から、シュレスタ氏自身の経歴まで幅広い内容を得ることができたが、ここではEISJとそこに通う子どもたちのことを中心にまとめる。

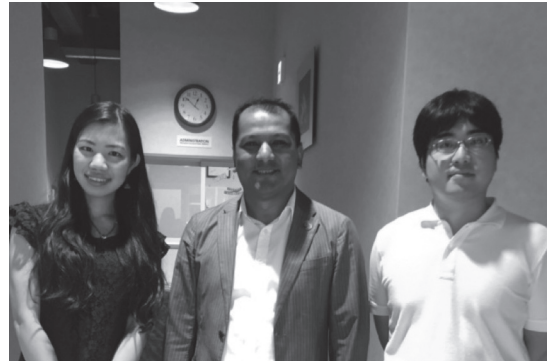


図3. シュレスタ氏（中）と筆者

○教員

2019年の時点では教員は25名、職員含めて32名ぐらいであり、日本語教師は4人が勤務しているとのことである。創立時は教員集めに苦労したそうで、特に在日ネパール人でネパールの教員免許を持っている者や実際に教育経験のある者を中心に集めたとのことである。現在もほとんどの教員は在日ネパール人から集めたが、一部ネパールから直接教員として来日した者も含まれる。

○言語

EISJでは校内でのコミュニケーションは英語で行われている。また、ネパール人にとってはネパール語の授業が必修となっており、ネパール人以外は選択授業として受けることができる。ただし、ネパール人といっても、ネパールで生まれ言語形成期をある程度経てから来日した子どもと、日本で生まれた子どもが混在していることに留意しなければならない。いずれの場合においても、現在日本で生活しているため、彼らには日本語能力が必要である。そのため、EISJでは日本語のクラスもある。教員の項で述べたように日本語教師も勤務している。日本語レベルについても様々で、混在している。

○学校生活

2019年時点では幼稚園から中学校までがあ

り、2020 年以降は高校も設置する予定である。年間行事としては入学式、運動会、文化祭などがある。部活動に関しては特にないが、授業の中にネパールのダンスや空手の授業があり、また、毎週金曜日午後は自由に遊ばせる時間を設けている。EISJ 地下に運動場がある(図4)が、そこまで大きいわけではないので運動会の際は近隣の西田小学校のグラウンドを借りて行っている。



図4. EISJ 地下の運動場

○地域とのかかわり

杉並区にあるネパール人学校として、本国だけでなく、地域とのかかわりも重要である。地域のイベントにも参加することによって、地域の活性化に加わりつつ、ネパール文化の紹介も行っている。学校でありながら商店会に加盟しているため、商店会のイベントでダンスを披露したり、夏祭りで神輿に参加したりしている。また、前述のとおり、近隣学校との交流は行われているようである。その他、シュレスタ氏は東京都の多文化共生推進委員会や新宿区多文化共生まちづくり協議会に参加するなど、地域の多文化共生事業においても情報発信を行っている。

○他の外国人学校とのつながり

他の外国人学校とのかかわりについては、EISJ 創立時にはインド人学校を参考にしたそうであるが、特に学校同士の交流はないという。

6. 2021 年 9 月のインタビュー (コロナ禍)

2019 年以降の変化、さらにはコロナ禍の影響と実態を把握するため、筆者(村本)が2021 年

9 月にオンラインで追加のインタビューを実施した。なお、シュレスタ氏は2019 年時点では EISJ 理事長であったが、2021 年時点では顧問理事となり、EISJ に直接的に関与するというよりは、相談や学内行事への参加が中心となっている。

○教員

2021 年 9 月時点で教職員数は 42 名である。ほとんどがネパール人であるが、日本人も 6 名おり、その他インド人、幼稚園にフィリピン人、英語の授業にアメリカ人などの教員もいる。前述のとおり、2019 年時点ではまだなかった後期中等教育「10+2」が2021 年ではそろったことで、職員が増員され、文系と理系でそれぞれの教員を非常勤で雇用している。また、学生数の増加に伴い、幼稚園を新宿区大久保に移転した関係で、送迎バスの運転手を手配する必要が生じた。なお、幼稚園では法律上の要件から、日本人の保育資格者が 1 人在籍している。

○学生の進路

2021 年時点では「10+2」が開設され、大学前の学年がそろった。高校 2 年生は全員で 24 人である。EISJ の中学生は現時点では一部帰国した者を除いてほとんどが EISJ の高校に進学している。高校卒業後は、日本の大学や専門学校への進学を希望する者が多く、今後は進路指導が課題となる。

ほとんどの学生は日本に残りたいと言っているが、EISJ では英語で勉強をしてきたため、海外の大学、あるいは日本の大学の英語プログラムに進学する選択肢もあり得る。いずれにせよ具体的な進路はまだ決まっておらず、学校としても今後初めての進路相談、進路指導が始まる。なお、日本の大学に進学するには、「家族滞在」から「留学生」に切り替える等、ビザの問題も考えなければならない。IESJ はネパールのカリキュラムに沿っており、日本の教育は受けていないことになるため、学生にとっては留学生枠で受験したほうが有利になるためである。入学後についても、留学生としての奨学金や授業料減免等を受けることが可能となる。その一方で、留学生で受験する場合でも日本語力については注意が必要である。EISJ の高校 2 年に入った生徒のうち、日本語能力試験 N2 取得者は 2 人、その他は N3、N4 を取得している。日本語の授業は週 3 ぐらいで行って

いるものの、大学入試を考えるとレベルとしてはまだまだ足りない。筆者（斎藤・村本）は日本語学校において日本語教師としても勤務しているが、やはり、日本の大学進学で一定の結果を残すためにはより高い日本語レベルが求められる。EISJ としても今後大学進学希望者向けのコースを作る可能性があるとのことである。

○学校生活

学生数が約 280 人に増加したため、前述のとおり、幼稚園を新宿区大久保に移転させた。また、2019 年のインタビューで運動会や文化祭などを開催していることを聞き、やや日本の学校行事のような印象を受けたため、改めて確認したところ、ネパールにも同じような行事があり、それを踏襲したものであるとのことである。運動会はグループ分けして競争させ、勝ったチームを祝う。さらに、ネパールのダンスの授業で学んだ踊りは保護者たちを呼んだ発表会や地域の祭りで披露している。なお、ネパールならではの学校行事としては、2 月の「サラスワティ・プジャ (Saraswati Puja)」というものが挙げられる。サラスワティは、日本では弁才天として知られる教育の女神で、彼女を祀ることで、学業の向上を願うイベントである。2019 年に EISJ を訪問した際も、地下の運動場にサラスワティが描かれていた (図 5)。その他、学校内で生徒や教員たちが一緒に食べ物を作って歌ったり踊ったりするイベントや、遠足などもある。現在もやはり部活動という形式のものはないが、子どもたちの運動のためにサッカー、ダンス、空手といった活動を行っている。



図 5. 運動場に描かれたサラスワティ (中)

○コロナ禍の影響

日本国内に限らず世界の教育機関でも新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けることになったが、EISJ も例外ではない。当初 2021 年には 300 人を突破すると予想されていた学生数も、やはりコロナ禍により保護者が失職して学費が払えなくなり退学する者が現れ、学生数が予想を下回り、前述のとおり 280 名程度となっている。退学した者は公立学校に移ったが、急に日本語のみの環境に学習環境に置かれることになり、日本語の問題があるという。

新型コロナウイルスの感染が拡大し始めた 2020 年 2 月後半から休校としたが、3 月中旬からはオンライン授業に切り替えた。7 月には対面授業に戻したが、9 月ごろに感染再拡大のため分散登校、半数対面半数オンラインのような工夫を行った。授業などによる子どもたちへの学習には大きな影響はなく、むしろオンラインのほうがよかったという子どももいたということだが、2021 年 9 月現在では対面授業に戻っている。なお、EISJ を含む外国人学校の多くは新型コロナウイルスの補助金や無償化の対象外であり、EISJ の場合は幼稚園のみ対象になっているとのことである。

7. おわりに

以上、EISJ 創立者であるシュレスタ氏へのインタビューを通して、在日ネパール人の子どもの教育実態の一端を窺い知ることができた。

これまで急速にその数を増やしてきた在日ネパール人も現在はコロナ禍により一時的に減少している。しかし、ネパール国内では技能実習や 2019 年に新たに施行された特定技能の在留資格での送り出しを行う機関が始めており、近い将来、コロナ禍を抜けた後は留学生に加え、労働者としての来日がより増加することが考えられる。また、それに伴う家族滞在や、日本で生まれる子どもたちもこれまで以上に多くなり、EISJ のような外国人学校の存在はより重要なものとなるだろう。子どもたちやその保護者に対するサポート体制の整備についても、自治体や政府としてより一層進め、多様な背景を持つ人々が安心して暮らせる多文化共生社会を推進していくことが求められる。

今回の調査では、顧問理事のみにインタビュー

を行ったが、教員や生徒、保護者などからも聞き取ることができれば、ネパール人学校、さらには在日ネパール人社会についても、より多角的に見ることができるだろう。今後の研究のさらなる進展が期待される。

謝辞

2019年9月のEISJの案内とインタビュー調査、および2021年9月のオンラインインタビュー調査の2度にわたり協力していただいたブパール・マン・シュレスタ先生に感謝申し上げます。

参考文献

エベレスト・インターナショナル・スクール・ジャパンホームページ <http://eisj-edu.com/> (2021年9月30日閲覧)

法務省出入国在留管理庁 (2021a) 『在留外国人統計』

法務省出入国在留管理庁 (2021b) 『在留資格一覧表』

文部科学省 (2021) 「世界の学校体系 (アジア)」 (ネパール連邦民主共和国のPDF) https://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/attach/1396848.htm (2021年9月30日閲覧)